

ブナ

Chinquapin oak / *Castanopsis sieboldii* / Sudajii / スダジイ

スダジイは奄美大島の常緑広葉樹の森の大半を占めるブナ科の木で、島のほぼ 8 割に生息し、生態系の中心的な植物である。樹高は 25m にもなり、太いブロッコリーのような見た目で見分けがつく。樹皮は濃い茶色で、若いうちは滑らかだが、成木になると表面に生える着生植物（エアプランツ）の種子を取るため、荒くなる。葉は広い楕円形で、4 月から初夏には長い茎に強い香りを放つ黄色い花を咲かせ、受粉の手助けをする昆虫は、繁殖を始める多くの野鳥を呼び寄せる。スダジイの実（またはドングリ）は小さく、通常約 1 cm 以下で、落ちたところに生えるだけでなく、動物や鳥によって他の場所に運ばれる。また、奄美大島では森の生き物の食料で、古くから人々の主食として食べられている。和名ではスダジイで、奄美大島ではシイとも呼ばれている。

Amami ring-cup oak / *Quercus glauca* var. *amamiana* / Amami arakashi / アマミアラカシ

琉球列島のみ川やマングローブの近くに生息するコナラ属の固有種で、石灰岩質の土壌を好み、5～20m の高さまで成長する。幹は緑と灰色の斑点模様の樹皮で覆われて、真直ぐに伸びる。葉は他のコナラ属に比べて細く、鋸歯があるため、アラカシ（粗櫟）と名付けられた。実は長さ 3 cm 程で多く実り、ルリカケスや島の野生動物の主な餌となっている。